

ピアノと私

鈴木 邦彦

1955 年 卒

なれそめ

昭和 10 年代初頭の或る朝、何時ものやうに子供たちを前にした幼稚園の先生が言った、「今朝は、オルガンの鍵が見つからないので、朝の歌はピアノの伴奏でやります」。それを聞いて胸を躍らせた一人の子供がいた。それが、幼稚園児であった私であった。83 歳になった今でも、その朝のことはクッキリと覚えてゐる。私がピアノの虜になったのは幼稚園児の時であった。それ以来、ピアノは私の人生を通しての強迫観念になった。誤解して戴きたくない。それは、私がまともにピアノを弾ける、といふことではない。まともに弾けないからこそその強迫観念なのである。説明は出来ない。物心付いて以来、私は物理的な意味でのピアノの音に特別な生理的な快感を感じるのである。それは鍵盤楽器であるからではない。チェンバロ、ピアノフォルテ、オルガンなどの音にはピアノが私に与える快感はない。

瀬をはやみ、岩にせかるる滝川の、――

私はピアノを習はせてくれと、只ひたすらに両親にねだったのだが実現しなかった。そこまでは良く覚えてゐるのだが、ピアノがそのままうやむやになった本当の経緯は私の知る由も無かった。それどころか、小学校時代は、何と、剣道を習はされ、冬の朝早く、授業の始まる前の寒稽古、詩吟などに憂き身を窶した。それはそれで面白かったし、懐かしい想ひ出でもある。私とピアノの仲を裂いたのが何であったかは、私がもう高校に入る頃

になって母から聞かされた。それによると、私がピアノ、ピアノとあまりにも煩いので遂にピアノを買ふことにして手付金まで払ったらしいのだが、最悪のタイミングで父方の祖父がそれを聞くところとなった。軍国主義華やかかなりし頃のことである、私の両親は「男の子にピアノなんか習はせて、どうするんだっ」と一喝されて、私は巧みに誤魔化され、全てはご破算になったとのことである。三人の子供、長男の私と二人の弟、から「貞子さん」と呼ばれてゐた私の母は、罪の意識があったと見えて、「やらせてくれ、やらせてくれ、とせがんだ時にピアノをやらせて貰へてたら、今頃、こんな苦勞をしなくて済んだのに」と私が文句を言ふと「それだけは言はないでよ」と酷く嫌がった。時には抗弁を試みた。「あんたが幼稚園の時からピアノをやっていたら、ピアノで身を立てたかも知れないでしょ。さうなると、どっちが良かったか、判らないでしょ？」然し、私がそれに対して「研究本職で、アマチュアとしてピアノを楽しむことは出来るけれど、ピアノ本職で研究を趣味にすることは出来ないから、いくらピアノが弾けても、ピアノ本職にはならなかったよ」と反論するので、彼女は何時しかそれも諦めた。武士の情、私もこの話題を持ち出すことは避けた。

割れても末に、

いくらピアノの音色が好きだと言っても、戦後の混乱状態で食べるものもままならず、戦災で焼け出されて、まともに住むところも

ない状態では、ピアノどころではなかった。私が生れて初めてピアノに触れることが出来るようになったのは高校二年生の時であった。私の高校は都立八中、戦後新制高校に移行して現在の都立小山台高校である。その高校の同級に、現在、名のあるピアニストである小林道夫がいた。そこで、彼に「俺にバイエルを教へろよ」といふやうな具合で、ピアノを始めた。勿論、家にピアノはない。毎朝、早く学校へ行って、授業時間まで音楽室のピアノで練習を始めた。それでも、大学入学までにバイエルを一通りやって、Czerny 30 番に手が届くところまで行った。当時、街を歩いてみて、窓から一本指の「鳩ポップ」などが聞えて来ると、「ああ、うちにピアノがあったらなあ」と「浮世の不公平」に酷く腹が立ったものだった。

私は昭和26年に東大教養学部理科二類に入学した。入学すると、何を置いても、まづ、学生が使へるピアノをキャンパスに物色した。駒場の教養学部の正門に入って左側に「九大」と呼ばれてゐた大講堂があって、その舞台裏の両袖、建物の裏側から入って左右両側の角の部屋にアップライトのピアノが一台づつコンクリートの床に置かれてゐた。多くのキーは象牙が剥れて木が露出してゐた。それでもピアノには違ひない。幸にして、弦

は一通り存在した。早速私はそれを弾くにはどうすれば良いのか探ってみたのであるが、何と、各々のピアノには一時間刻みで24時間ぶっ通しの時間表が存在した。私は、直ちに申請して、毎日、朝の6時から7時までの一時間をあてがはれた。因みに、夜中の12時から早朝にかけての時間はキャンパスの寮に住んでゐた寮生に割当てられてゐた。勿論、週日の昼間、講義時間中はダメである。駒場での最初の二年間、これが私のピアノであった。それ以外には、時折、小林道夫からレッスンを受けるので、彼の家へ行って、練習させて貰った。彼は、中目黒と恵比須の中間に住んでゐて、どちらの駅からでも歩いて行けた。彼の父君は東大医学部出身のお医者さんで、企業の嘱託医をなさってをられたと記憶してゐる。小林の母君は「百合さん」で、私の「貞子さん」と親しく、二人突き合せて置くと女野次喜多の趣があった。

駒場の最初の二年間、「九大」の袖のピアノで練習するために、私はたとへ授業はサボっても大学へは朝早くに行った。その頃、家族は小田急線の祖師谷大蔵へ引越したので、小田急で下北沢へ行き、乗換へて東大前へ、冬の朝は朝日が昇るのを見ながらの通学だった。ところが、そんな朝は寒い。勿論、暖房などはないのだから、一時間の持ち時間



第九大講堂、現在の900号館、正面



裏側、右端に見える裏の入口から入ってすぐ左の部屋に私があてがはれたピアノがあった

と言っても、指が暖まるのに30分かかる。色々、工夫した。最初の10分程、手袋をしたままでHanonをさらふと指が早く暖まることを発見した。

最近、駒場キャンパスを訪問する機会があった。正門に入って左、昔のままの九大が今は900号館と呼ばれて存在した。入ることは叶はなかったが昔ピアノが置いてあった裏の角部屋も、外から見る限り健在であった。昔を探すことは難しくなってしまったキャンパスで、九大の他には、正門正面の本館、その右、九大に向かひ合って昔の図書館、更にその裏の私達の頃には教務などの事務室が入ってゐた建物などだけが昔のままであるやうに見えた。キャンパスの西北の外れにある野球場は60年前のまま、変わったやうには見えない。

自分のピアノ

やがて、教養課程二年を終って、教養学科、科学史・科学哲学分科に進んだ頃、遂に、家にピアノを買って貰へることになった。これは、私の人生の一つの画期的な節目であった。昭和20年代後半の話であるから、大袈裟に言へば日本が戦後の困難な時期を脱却し始めてゐたことの象徴であったとすら思はれる。両親が住宅公庫の籤引きに当って、祖師ヶ谷大蔵に自分の家を建ててそれまでの共同社宅から移り住んだこともピアノを買ふことが出来た重要な要素であった。当時、神田神保町の辺りに「福山ピアノ」なる店があって、名の通った大手のメーカーのものでない、群小メーカーの比較的安いピアノを売ってゐたが、家に運び込まれたのはWで始まる名前の、Wilhelmだったか？ピアノであった。これでやっと家で練習が出来ることになった

のだが、途端に、私の早起きは終わった。家にピアノがないと死に物狂ひで機会を見つけて練習しようとするのだが、ひとたび、家にピアノがあるとそれが当り前になって練習をサボる。人間は勝手なものである。

医学部・インターン時代

「科哲」を卒業した私は、医学部の入学試験を受けて、学士入学した。それ以来、後年インターン中、早起きを強制されるやうになるまで、医学部の四年間を通して、私の生活には午前中の授業は原則として存在しなかった。時たま早く出かけるのは医学部山岳部でトレーニングと称して御殿下の運動場でランニングをする朝などに限られた。はっきり言って、私には医学部の講義、臨床実習などには興味が持てなかった。科哲での二年間の後の医学部は一世紀逆戻りした感を与へた。時たま講義に出ても、階段講堂の上の方で居眠りしてゐるので、級友からは「お前、出て来ても、どうせ寝るんだから、来ない方がいいよ」と言はれた。貞子さんは医学部には午前中の授業はないのだと永年思つてゐた。医学以外にやりたいことが山程あった。山岳部で一年のかかりの日にちを山やスキーで過した。日本野鳥の会の創始者で当時砧の現在環状八号線が通つてゐる辺りにお住まいだった中西悟堂さんとは小学校以来のご縁であったこともあって、私は日本野鳥の会東京支部の幹事を務めてゐた。あの頃は祖師ヶ谷大蔵と千歳船橋の間は広々とした畑ばかりで、祖師ヶ谷の私の家から中西さんのお宅まで、縄手伝ひに歩いて行けた。当時あった「写真サロン」なる写真雑誌の月例にも憂き身を賣して時折入選したりしてゐた。医学部同窓会新聞「鉄門だより」の編集も結構忙しかった。長所、短所共に鵑外に強い親近感を持つ私は、

「舞姫」から「渋江抽斎」「北條霞亭」に至るまで、鷗外を耽読した。因みに、私の駒場時代に毎月一冊づつ岩波から出版された鷗外全集は、私と共に太平洋を渡り、半世紀後に又私と共に帰って来て、いまだに私の書棚にある。又、当時お能に凝って、今は最早存在しない多摩川遊園地の裏にあった能楽堂へ毎月通った。観世鍊仙会なるものがあって、我々でも買へた学生券が存在した。当時は、観世華雪の時代で、その下に鍊之丞、そのご子息が後に伝統的な能楽と現代の舞台芸術との融合に努力した寿夫、栄夫、静夫の所謂、観世三兄弟であった。小鼓の名手、幸祥光氏の面影などは未だに鮮やかに記憶に残っている。鷗外全集と共に、野上豊一郎編集の謡曲全集も太平洋を往復した。又、能楽との繋りで、日本の現代音楽に興味を持ち、高田三郎、平尾貴四男等の活躍の場であった地人会の発表会、芥川也寸志、黛敏郎、団伊玖磨の「三人の会」の発表会などには精勤に足を運んだ。こんな毎日の中で、医学の勉強などが出来るわけではない。私が医学部を卒業出来たのは、ひとへに、入学したら最終試験に通りさへすれば良いのであって、その中間のことは一切不問、といふ、まことに有難い当時の制度のお蔭であった。今だったら、卒業も出来ず、国家試験も落ちたかも知れない。私はお世辞にも良い医学生ではなかった。然し、今となって、プラス・マイナス、全部、足し算してみると、興味に任せて、やりたいことをやった分だけ人生で得をした。そんな調子であったから、私のピアノは医学部時代は停滞してゐた。小林道夫は既に上野を卒業して音楽家として忙しくなっていたから、最早教へて貰えない。殆ど、独学で Czerny の 30 番を曲りなりにも通り抜けて 40 番に挑戦したが、最初の 10 番も行かない辺りで永久に挫折した。

医学部を卒業すると、当時は一年間のインターンが義務であった。私は、その頃立川にあった米国空軍病院でインターンをするようになった。日本人インターンのためにあてがわれた基地内の独身将校宿舎の一部屋で一年間を過した。当直でない週末以外は家には帰れないわけであるが、宿舎は病院の建物の棟続きで、その外れにチャペルがあって、そこにアップライトのピアノがあった。鍵は掛けておかなかったの、夜中など、時間のある時にそのピアノで練習することが出来たので禁断症状にはならなかった。夜更けて礼拝に来る人達もボツボツゐたが宗教には同情心すら持ち合せない私はそれを無視したために、病院に文句が行って、お偉方から「誰かが礼拝に来たら、その間はピアノを弾くのは自粛してくれ」とお達しを受けた。余談であるが、インターンは順番に各科を回るのであるが、夜間の産科の当直は年を通してあった。立川空軍病院の一年間に私は「何で赤ん坊は夜中過ぎにばかり生まれるんだ」とぼやきながら、約 50 人の新生児をとりあげた。同級生に訊ねても、産婦人科に進んだ連中を除けば、この数は記録的らしい。

渡米、永い別離と再会

インターンを終った私は 1960 年の 6 月、榎美智子さんが、安保デモで亡くなった晩に横浜を出港して、創設間もない New York の Albert Einstein 医科大学に神経内科レジデントとして留学した。この前後の経緯、New York での最初の 2～3 年間の話は、当時の New York の音楽界の思ひ出も含めて、既に書いた（鈴木邦彦 Saul R. Korey と私、1960 年代初めの New York での思ひ出、蛋白質、核酸、酵素 vol 48、1296-1305 ページ、2003 年）。そこには書かなかったが、私が

New York へ行った 1960 年は小澤征爾氏が Leonard Bernstein の代理として華々しくデビューした年でもあった。しかしながら、当時のレジデントの当直は、一晩置き、一週末置き、当直でない時間は極力眠りたい生活であったから、ピアノどころではない。その後、研究室に入って、当直から開放された後も、安月給のアパート住みひで、結局、1960 年から 6 年間はピアノに触れることもなく過ぎて行った。

私とピアノとの縊りが戻ったのは、全くの偶然からであった。1965 年の夏に、長男が生まれ、私は、依然として安月給ではあったが、駆け出しの Assistant Professor として、多少の余裕も出来たので、それまで住んでいたアパートから、New York 市の北の郊外に一軒家を借りて住んでみた。そこへ現れたのが私の高校の同級生、山城 孝君の義理の妹で、ピアニストの高柳（現、清川）美也子さんであった。彼女は、フルブライト留学生として Manhattan School of Music に留学のために New York へ来たのであった。マンハッタンへ通ふにはやや不便ではあったが、結局、彼女は私の家に寄寓することとなった。勿論、本職のピアニスト、家にピアノを必要とする。彼女曰く、「一般の家庭にあるみたいな、スピネットピアノは新品でも一年もしないうちに弾き潰れてしまひます」。結局、彼女は中古のピアノ店へ行って、腐っても鯛、古い Steinway のアップライトを購入した。このピアノは、1903 年製、文字通りの「時代物」であった。殆ど私の背丈ほどもあり、頑丈極まりなく出来てゐて、途方もなく重かった。バイオリンではない、ピアノであるから、古い方が良く、といふわけには行かない。駒場の九大講堂の袖にあったピアノ程ではなかつ

たが、アクションにもガタが来てゐた。そのお蔭で、家にピアノが存在することになり、彼女が弾く合間を縫って、私も、又、ピアノに座るやうになった。彼女は、20 歳を過ぎたばかり、それでも、音楽学校のピアノ科の学生である、「彼女も人なり、我も人なり、ああ、それなのに、——」と私は劣等感に苛まれた。彼女が留学を終へて帰国する時にピアノはそのまま置いて行ってくれたので、このピアノは、結局、1966 年から 1982 年まで私に付合ってくれることになった。

研究室での事故

1970 年代には、自分自身の研究、増彙て来た雑用、それに、国際神経化学会、米国神経化学会などの学会の仕事、更には、Journal of Neurochemistry の Chief Editor の責任などにかまけて、ピアノは上達するどころか、退化の兆候明らかであった。そんな時、1975 年に研究室で事故を起した。この事故によって、私とピアノとの関係は一変した。詳細は省くが、私は右前腕の内側に骨に届く重傷を負った。事故が起った直後は、右の手首を持ち上げることは全く不可能であった。私も曲りなりにも神経医である、前腕を通る三本の主な運動神経を全て切断したのではないかと判断し、これで、ピアノどころか、一生、不自由な右腕で生きて行かなくてはならないかと観念した。然し、担架に横たはりながら、自分で更に診察して、右手の親指の先と小指の先とで物を掴んで持ち上げる機能は正常に保たれてゐることを確かめることが出来た。これは、手の運動を司る主な運動神経は機能してゐることを示すものである。結局、幸運にも手首を持ち上げることが出来なかったのは手首の伸張筋そのものをバッサリと切断したことによるものであって、運動神経を切

断したことによるものではなかった。切断した筋肉は手術によって縫合されたが、殆ど完全に切断された筋が元通りに回復するわけではない。縫合部は繊維化するのみならず、傷は長期に亘って、少しずつ、然し、確実に収縮する。私の右の手首は、未だに堅く、運動範囲にも制限がある。「手首を柔らかかに、手首を柔らかかに」が金科玉条に近いピアノを弾くには致命的である。この、楽器を弾くのに手首を柔らかかに、といふ点に就いては、寺田寅彦も彼の随筆の一つで彼のバイオリンに就いて言及してゐる。「手首の関節が完全に柔らかくて自由な屈撓性を備へてゐて、極めて微妙な外力の変化に対しても鋭敏に且つ規則正しく弾性的に反応すると言ふことが必要条件であるらしい」。手術後、3週間して、ギブスが外れた時、肘、手首の関節は硬直し、試しにピアノの前に座ってみた時には、これで、ピアノとは縁を切るよりないと思った。それなのに、未だに腐れ縁が続いてゐるのは、ひとへに強迫観念による以外の何物でもない。私の名前は、Paul Wittgenstein ではない。左手だけで通用すると言ふわけには行かない。1975年以來、ピアノは私にとって、音楽のためといふより、リハビリのための道具となったのである。因みに「科哲」の読者には興味ある事かも知れないが、有名な左手のピアニスト、Paul Wittgenstein は科学哲学で名のある Ludwig Wittgenstein の実兄である。

Steinway Model L

ピアノは私の強迫観念であると言った。理性で現実的に判断して、然るべく処理できないからこそ強迫観念なのである。この研究室での事故でピアノを諦めるのが現実的な人間の取るべき道であることは明らかであった

が、強迫観念は私を駆り立て続けた。然し、この事故は私の「何時の日か、もっとピアノが上手になったら、上等なピアノを買ふ」といふ永年の悲願を達成するためには致命的な障害となるものであることも自明であった。既に幼稚園・小学校時代にピアノを学ぶ機会を逸したことが人生最大の悔ひになってゐる私である、ここで、もう一つ、ピアノに纏はる悔ひを残したくはない。「上手くなるのを待ってみたら、一生、新しいピアノは買へない。今、ピアノを買はう！」と決心したのは1982年の初頭であった。既に、うちの息子はコネチカット州にある全寮制の高校に行つて、殆ど家にはゐなかつたし、この年の前半、私の家内は、所謂 *Sabbatical leave* で半年間、東京、小平の国立精神神経センターにお世話になることになってゐたので、半年間の留守番独身生活が私の目の前にあつたこともこの決心の動機となった。

買ふピアノに就いては迷ひは無かつた。もう、何年も前から買ふ時には Steinway の6フィートのグランドピアノ、Model L と称するもの、を買ふつもりであつた（因みに、コンサートグランドは9フィートである）。これは、貞子さんの持論に基づくものであつた。「物を買ふ時には、買へる範囲で一番良いものを買ひなさい、後悔しないわよ」。Steinway の大きなショールームは Einstein 医科大学がある Bronx から Whitestone Bridge を渡つてすぐの Long Island の北岸にあつた。大きな部屋に100台とも思へる数のピアノが並んでゐて、私が、Model L に興味があると言つたら、「今、4台あるから、全部試してみて、気に入つたのに決めてくれ」と言はれた。ここで、ピアニストなら、誰でも知つてゐることかも知れないが、私として

は面白い経験をした。同じ新品の Model L でも、4 台が全く異なった音色なのである。明かるい音色のものから、地味で謙虚な音色のもの、一台は、鍵盤の上半分は極めて明かるい音色で、下半分は地味、と言った具合である。私は、やや地味だが、全ての音域について平均した音色の一台を選んだ。このピアノは結局、2007 年に、私が 47 年間住むことになったアメリカから引上げて、日本に最終的に帰国するまで 25 年間、半年毎に調律されて、私と行動を共にすることになった。

発達期の脳

ピアノが幾ら、立派な新品になっても、私の腕前には、何のご利益もない。出口の見えない私とピアノとの格闘は続いた。脳・神経系の独特な性質の一つはその発達期に、然も、各々異なった限られた期間に、特定の構造・機能が確立されることである。他の臓器にも勿論 分化・発達 はあるが、脳ほど複雑で、然も、異なった機能の発達が異なった発達期に限られてある臓器は存在しない。ピアノを弾くと言ふ比較的単純に見える機能でも、腕、手、指の成長、運動筋の発達、視覚刺激を指の運動に変へる反射系の確立、などから譜面を読んで理屈で理解する能力、更には感情・情緒の発達、に至るまでを要求される。ピアノだけを取っても、我々は、皆、色々な程度の「才能」を持って生まれて来てあるが、これらの総合的な機能を最大限に引き出すためには発達期の脳の最適期を捉へて鍛錬することが必須である。如何に生まれながらの才能がある人でも、鍛錬の最適期を逸すると、才能は平凡で、大した努力もしなくても、最適期を捉へた人に努力だけで追いつくことは難しい。ましてや、才能は平凡で、鍛錬の最適期を逸した私などに在いてをや、である。

上の議論は、ピアノだけではない、全ての経験、訓練、学習に当嵌まる。困難と努力無しには新しいことを学ぶことは出来ない。最適な脳の発達期を賢明に選び、鍛錬の方法を工夫することで、困難と努力をいくらかは軽減することは出来るし、それは、極めて望ましいことである。例へば、私は中学 2 年の時に「妻子異国に婿さん怖くなく」を覚えた。中学二年生がこれを記憶するのは「円周率は略 3 である」を記憶するのと同じ程度の努力で出来る。然し、そのご利益で、私は死ぬまで円周率を 15 桁まで何の苦も無く言へるのである。そのやうな工夫によって、100 の困難と努力を 80 にすることは出来るかも知れないが、それ以上は不可能である。困難と努力なしに、チャランボランと気楽に遊びながらも、新しいことが学べるいふ観念は我々には変へることの出来ない脳の発達・生理上の事実を無視したものである。そんな教育論、教育制度はいづれ自然から酷いしっぺ返しを食ふに決つてゐるのに、近頃は「ゆとりの教育」などと称して「怠けの教育」がのさばったりしてゐる。「学問に王道無し」は全てのこと当嵌まるのである。

閑話休題、ピアノに戻る。私みたいに高校上級までピアノを学ぶ機会のなかった人間がピアノに向かった時に共通した幾つかの問題がある。まづ、どんな曲でも、徹底的に覚へてしまふまでは弾けない。覚へることによって譜面を必要としなくなるのであるが、逆に譜面を見ながら弾くことは出来ない。如何に簡単な曲でも初見で弾くなどといふことは別の人種のやることであつて、私の意識にはない。小林道夫がよく言った、「目から入った譜面は、頭を通らないで、そのまま手に行くんだよ」。これは生理学上荒唐無稽であるのみならず、心理学的にも私個人には全く当て嵌まらない。そもそも、上下に串刺しになつ

た沢山のお団子は全体が一つの Gestalt として意識に入るべきものらしいのであるが、私の頭は、「これは C、その次は二つ上の線の上にあるから G、その上は臨時記号が付いてゐるからー？」といふ調子で情報処理をするのであるから、リアルタイムで弾けるわけがない。覚えるまでは弾けないと言ったが、単に暗譜すると言ふことではない。何百回、何千回と練習することによって「指に覚えさせる」まで弾けないのである。このシステムには三つの大きな欠点がある。欠点の第一は、「指が覚えてゐる」曲は意識のコントロールを受けないで、指が勝手に動くのである。誰でも経験があると思ふのだが、昔から書いてゐる漢字を書く場合、無意識にならスムーズに書けるのだが、一度、意識して「この字は？」と思ったら、辞書でも見なくては最早書けない。然し、その次の時には、又、意識しないですっと書けるのである。指が覚えてゐる曲も同じで、無意識になら弾けても、ひとたび、引っ掛かったら全く弾けない。そんな時でも、何小節か前に戻って、意識を滅却して弾くと、今弾けなかった箇所もすっと通り抜けられる。第二の欠点は、指が勝手に動いてゐるうちに「悪い癖が付く」のである。絶えず注意を払って、悪い癖が付いたら、それが定着しないうちに矯正しないと二進も三進も行かなくなる。ところが、「矯正」するには意識の関与を要求される。それは、上の「意識したら弾けない」といふ問題と真っ向から競合する事態となる。三つ目の欠点は、「指が覚えた」曲は、数年弾かないと、全然、弾けなくなる。又、弾けるやうになるためには最初から学ぶのに近い努力と時間を必要とするのである。従って、自分のレパートリーを持ち、それを増やして行くと言ふことが出来ない。

譜面を見ながらリアルタイムで弾く、といふ行動は生理学的にも、心理学的にも面白いものである。上に書いたやうに個々のオタマジャクシを分析的に見たのでは、リアルタイムで弾けるわけがない。初見の達人と言はれる人は小林道夫が言ったやうに、目から入って来た刺激を「頭を通さないで」つまり、意識を通さないで、指の運動に変換することが出来るらしい。要するに全体が一つの Gestalt として意識に入ってくるのである。そのためには、全体が一定の規則に従ってゐることを必要とする。一見真っ黒に見える譜面を何の苦もなく初見で弾ける人でも、その中に規則に合はない音が幾つか入っていると、それは無視するか、規則に合ふやうに変へて弾く、と言ふことが知られてゐる。勿論、それは、意識のコントロールなしに行はれるのである。古典から 19 世紀辺りの曲を初見で弾きこなす人でも、規則に従はない音が多くなる近代となると、苦勞する、ましてや 12 音音楽となると、指の技術から見れば、単純に書いてあっても、文字通り、全くお手上げになる。勿論、12 音音楽にはそれなりの厳密な規則があるが、それは、彼が永年に亘って経験して来た規則とは異なるものであるがために、大脳生理が扱ひきれないのである。何ページもある文書でも、自分の言葉ならさっと流し読み出来ても、よく知らない外国語では流し読みは出来ないのと似た現象なのではあるまいかと思ふ。私には、全ての譜面が外国語なのである。一語、一語、意味を考へ、構文を考へ、辞書の助けも借りなくては読めないのである。この晩くにピアノを始めた人間の悲哀は、指の技術の上手、下手の問題とは別に、ピアノと共に育った人たち

と対照的である。さういふ人達は何時も言ふ。「譜面を見なくちゃあ、弾けない」。私はそれが羨ましくて仕方がない。「譜面を見なくては弾けない」といふことは「譜面を見れば弾ける」といふことなのである。ああ、昔、弾けてた曲を、今、譜面を見て弾けたらなあ、と思ふ。昔、弾けてたけれど今は最早弾けなくなった曲の屍、文字通り、累々たるものがあるのである。

Model L と別れて、ヤマハサイレントピアノとの新生活

私は 1986 年に、Albert Einstein 医科大学から North Carolina 大学へ移ったので、Model L も私と共に引越した。あの辺りは田舎で土地は安い。10 エーカー(約一万二千坪)の地面に、林に囲まれて建てた家に住んでいたので、四六時中、近所迷惑などは考へる必要のない環境で、妙な時間に雑音を立てたら離婚の危険を犯すことになる以外には、ピアノを弾くことは自由であったが、神経科学センター長などをやってみたので、朝は、6時から大学へ行く生活であった。それでも、ピアノを捨てきれない私は、ピアノに関する限り、マゾの傾向があると言はれても止むを得ない。或ひは、ピアノといふ「悪女の深情け」から脱け出せなかった、と言ふ方が当てあまるかも知れない。

然し、2003年に私は、North Carolina 大学を退職した。定年を設定することが違法になってゐる米国であるから、辞めなくてはならないわけではなかったが、71歳にもなって、残りの人生を如何に生きるかを定めるべき時が来たと思ったのである。私は半世紀近くアメリカに住んで、臨床医としての最初の5年間程の後は、常に、生化学を主体とした研究者としての生活をして来た。然し、妙

なもので、長く住めば住むほどに、矢張り米国は自分の国ではないと痛感するようになって来た。自分が育った歴史、文化の背景は根強いものである。アメリカの極端な実利主義と私の神様アレルギーとの相乗作用で、更に、絶妙のタイミングで大統領に就任した George W. Bush が私の背中に最後の一押しを与へて、私は日本に帰って来ることにした。1960年以來住み続けた米国ではあるが、私は国籍は日本人のままであったので、人生の最後の期間を日本で過ごすことに就いて法律上の問題はなかった。2007年に私はアメリカの家も、車も売り払って帰国し、2008年には米国永住権も放棄した。

私は東京生れの東京育ちである。この年齢で、日本に帰って住むには都心に近い手のかからない気楽なマンションに如くはないと思ったので、港区にマンションを購入した。日本の住宅事情から見れば、二人で住むにはかなり贅沢なサイズだと思ふが、それでも、North Carolina の家に比べると、三分の一の広さである。Model L を持ち込んでも、置く場所もないし、その上、マンションであるから、勝手な時間にピアノを弾いたら離婚どころではすまない。涙を吞んで、貞節なる Model L とは袂を別った。幸ひ、ピアノの達者な弁護士女性が買ってくれたので、良い再婚先に恵まれた。

一生続く強迫観念である。Model L とは別れても、ピアノ無しでは暮らせない。丁度、2002年に私は日本学士院賞なるものを受賞した。その賞金でヤマハのアップライトで、サイレントピアノなるものを購入した。家内は「まだ、何もないカランプのマンションに、真っ先にピアノを買った」といふ。その通りである。然し、私が貰った賞の賞金で貰っ

たのであるから、勘弁して貰ふことにする。それまで、私は、マンションには所謂電子ピアノしか可能性がないのかと思ってゐたのであるが、偶然にサイレントピアノの存在を知った。このサイレントピアノなるものは、中々の優れたものである。ご存じない向きもあるかと思ふので一寸説明する。これは、そのまま使へば、構造上、機能上、全ての面で通常のピアノである。ハンマーが弦を叩いて、音響板を通して、通常のピアノの音が出る。然し、中央のペダルが特別の機能を持ってゐて、それを踏み込んだ状態にして置くと、電子ピアノとしてのスイッチが入って、ハンマーが弦に当る直前で止って、音は出ないやうに出来てゐる。それと共に、鍵盤からハンマーまでの機械的な動きをセンサーが監視して、そのスピード、強さ、などを電子情報に変換して電子ピアノとして機能する。これには通常のピアノにも、電子ピアノにもない利点がある。まづ、必要に応じて、全く普通のピアノとして使用できる。サイレントモードにしても、機械的には鍵盤からハンマーに至るアクションなどは全く通常のピアノであるから、タッチなどは全く変わらない。サイレントで使つてゐる限り、音は電子的に作られるのであるから、調律の必要はない。周囲を気にする必要はないから、マンションの環境でも、何時でも弾くことが出来る。

このサイレントピアノが私の残りの人生の伴侶となることだらう。幼稚園以来、私の人生を通してのピアノとの腐れ縁が終るのも、さう遠い将来のことではない。それは、この世に屢々ある love and hate relationship であつた。といふより、むしろ、片思ひの関係であつたと言つた方が近いかも知れない。純粋に実利的な見地から見たら、私は全く何の得にもならなかつたピアノに費やした時間

と労力を他の、もっと得になることに使ふべきであつたといふ議論もあり得ることは百も承知である。私は、右腕を半分に切つて以来、人前でピアノを弾くなどといふことは夢にも思はない。リハビリの成果を人にひけらかす奴はゐない。それでも、今後もピアノが私に付いて回ることには就いては疑問の余地はない。

■ すずき くにひこ

1955年「科哲」卒。1955年東京大学医学部医学科卒。1960年渡米。Albert Einstein 医科大学、Pennsylvania 大学を経て、1986-2002年 North Carolina 大学 (UNC)、UNC 神経科学センター長、神経内科・精神科名誉教授。2008年に米国の永住権を放棄して最終的に帰国。